

琉球大学学術リポジトリ

芥川龍之介「お富の貞操」論

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 保博, Ozawa, Yasuhiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/971

芥川龍之介「お富の貞操」論

小澤保博*

A Study of Ryunosuke Akutagawa's Otomi's Virginity

Yasuhiro OZAWA*

1

作品「お富の貞操」（「改造」大正十一年九月）を論じるにおいては、必ず引用される芥川書簡がある。「（一）明治元年五月十四日（上野戦争の前日）はやはり雨天だつたでせうか（二）雨天でないにしてもあの時分は雨降りつづきだつたやうに書いてありますが、上野界限の町人たちが田舎の方へ落ちるのにはどう云ふ服装をしてゐたでせう？殊に私の知りたいのは足拵へです足駄、草鞋、結び付け草履、裸足、等の中どれが一番多かつたでせう？（三）上野界限、今日で云へば伊藤松阪あたりから三橋へかけた町家の人々は遅くも戦争の前日には避難した事と思ひますがこれは間違ひありますまいか？」（「塚本八洲宛書簡」大正十一年三月三十一日）

歴史小説「お富の貞操」を書く上での事前調査が、実際にどの程度作品の内部に取り入れられているか、項目別に見ておくと。「（一）耳にはひるものは連日の雨の音ばかりだつた。雨は見えない屋根の上へ時々急に降り注いでは、何時か又中空へ遠のいて行つた。（二）それは素裸足に大黒傘を下げた、まだ年の若い女だつた。（三）官軍は明日夜の明け次第、東叡山彰義隊を攻撃する。上野界限の町家ものは匆匆何処へでも立ち退いてしまへ。」（「お富の貞操」）、過去の一日に虚構の世界を構築するため作品背景に現実的な事実の重みを加えている作者の手法が分かる。

「今僕が或テエマを捉へてそれを小説に書くと

する。さうしてそのテエマを芸術的に最も力強く表現する為には、或異常な事件が必要になるとする。（中略）昔か（未来は稀であらう）日本以外の土地か或は昔日本以外の土地から起つた事とするより外はない。」（「澄江堂雜記」三十一「昔」）、この文芸理論に沿って書かれた作品は、作品背景に歴史的事実の細部をなぞりにしない手法により成功したといえる。「龍之介が主題としたのは若い女の突発的な、微妙な心理であるが、それが殆ど目立たないほどに、背景の内に溶かしこまれ、渾然とした味があり、龍之介一家の芸となっている。（中略）物語に現実性をあたえる為に、背景や事実には動かない所をつかもうとしたが、その苦心は報いられているといつてよい。」（芥川龍之介「新潮文庫」と吉田精一は、「お富の貞操」創作のために払った芥川龍之介の努力を評価している。

「お富の貞操」は作品構成において前後編二つの舞台設定を持っている。前編は、明治元年五月十四日官軍と彰義隊の上野戦争の前日、後編はそれから二十三年後の明治二十三年三月二十六日第三回万国博覧会開会式当日の上野広小路の街頭、五月雨の降りしきる上野界限の商家で因縁の出会いをした一組の男女が、二十三年の年月を隔て偶然一瞬の再会をするという、芥川龍之介が繰り返して愛用した小説手法である。主題は、異常な状況を背景にした「若い女の突発的な、微妙な心理」であるが、この主題を内包した作品全体を統一す

*国語科教育教室

るもう一つの主題がある。二十年以前に異常な時を共有した男女の再会の一瞬のドラマである。最初にこの再開の主題について考察する。結果的には、この主題の解明が最初の主題「若い女の突発的な、微妙な心理」の謎を解明する事になろう。

アナトール・フランス「バルタザアル」(「新潮」大正三年二月) 翻訳の芥川作品に与えた影響は顕著で、虚構の物語世界を結末で歴史上の事実結びつける手法は、若い芥川龍之介の文学的手法に決定的な影響を与えた。又時間的空間的隔たりを、前編の虚構の世界を後編の意外性により転倒させ、読者を一抹の余韻に引き込む手法も多くアナトール・フランスの影響であろう。

「お富の貞操」の主題について論じる以前に、虚構の文学世界を斬新なものにしているこの手法について見ておく。映画「アラビアのロレンス」「ドクトル・ジバゴ」(共に監督は「デヴィッド・リーン」)は、芥川龍之介が愛用したこの文学的手法を使っている。最近の映画では「ラストエンペラー」(監督は「ベルナルド・ベルトルッチ」)が同じ物語手法で成功を収めている。「韃靼疾風録」(「司馬遼太郎」昭和六十三年)も前半の波乱万丈の虚構の物語世界を鳥瞰するように、大明国が愛新覚羅一族により倒される東洋史の歴史に結び付けている。こうした文学的手法は、推理小説においては定番で多くの作品的効果を上げている。榎山良昭「スターリン暗殺計画」(「徳間書店」昭和五十三年十月)では、陰謀を画策した日本陸軍の高級参謀が戦後ソ連に抑留された後、亡命ロシア人の一人が共産党員として再登場するという劇的な場面を持つ。麗羅「桜子は帰ってきたか」(「文芸春秋」昭和五十八年六月)でも作品構成は同じである。

「お富の貞操」の主題「若い女の突発的な、微妙な心理」を解明するためには、相手である乞食の「新公」の実態を把握しておかなくてはならない。

「濡れ鼠になつた乞食だつた。(中略)顔は髭に埋まつた上、膏薬も二三個所貼つてあつた。しかし垢にはまみれてゐても、眼鼻立ちは寧ろ尋常だつた。」(「お富の貞操」前編)

「今の新公の体は、駝鳥の羽根の前立だの、激めしい金モオルの飾緒だの、大小幾つかの勲章だの、

いろいろの名誉の標章に埋まつてゐるやうなものだつた。」(「お富の貞操」後編)

明治元年五月十四日、上野戦争の前日住民の立ち退いて無人となつた一商家で運命的に出会つた一組の男女、乞食の「新公」が二十三年後に明治新政府の高官として再登場することが、「お富の貞操」の作品構成上重要である。乞食の「新公」が、再び乞食の老いた「新公」として登場したのでは、作品「お富の貞操」は文学作品として破綻してしまうのである。「お富の貞操」(前編)には、「若い女の突発的な、微妙な心理」を解く鍵は、何も記述されていない。「お富の貞操」(後編)にも具体的謎解明の記述があるわけではない。しかしその状況を付度することは可能だ。

乞食の「新公」に体を与えようとした自分の行為、そして「新公」が最終的にお富の肉体を求めなかつた行為、この二つの行為の謎について現在の彼女も理性において理解できないでいる。しかし感性において彼女は、全てを了解、是認して過去の自分を誇らしく追認した。「彼女は馬車とすれ違ひながら、何か心の伸びるやうな気がした。」という記述から、二十三年前の行為の謎、動機の解明は、乞食の「新公」が明治新政府の高官として彼女の横を馬車に揺られて通り過ぎて行った事にあると考えるのが自然である。「それらは皆お富には、当然すぎる程当然だつた。」という説明は、明治元年若い娘であつたお富が、二十三年後の二人のこうした再会を幾分か予感していた事を意味するかも知れない。

「二十年以前の雨の日の記憶は、この瞬間お富の心に、切ない程はつきり浮んで来た。彼女はあの日無分別にも、一匹の猫を救ふ為に、新公に体を任さうとした。その動機は何だつたか、-彼女はそれを知らなかつた。新公は亦さう云ふ羽目にも、彼女が投げ出した体には、指さへ触れる事を背じなかつた。その動機は何だつたか、-それも彼女は知らなかつた。が、知らないのにも関わらず、それらは皆お富には、当然すぎる程当然だつた。彼女は馬車とすれ違ひながら、何か心の伸びるやうな気がした。」

2

上野広小路を家族と散策する現在のお富に二つ

の時間が交錯している。明治元年五月十四日、上野戦争前日の記憶とそれを回想する明治二十三年三月二十六日の現在の彼女の時間である。「—それも彼女は知らなかつた。」までが前者の時間であり、「当然すぎる程当然だつた。」「何か心の伸びるやうな気がした。」という二つの感想は後者の時間である。一匹の猫のために新公に身を任せようとした自分の行為の意味、新公が彼女の肉体を求めなかつた意味、二十三年前の二つの行為の意味を当時の彼女は理解できなかつたが、現在の彼女の視線から過去を鳥瞰して、全ては当然の行為であった。そして過去の自分の行為は現在の彼女にとっては、心弾む記憶であった。現在の彼女に開放感を与える二つの行為の意味は何か。理由は二十三年前運命的に出会った乞食の新公が、有力な政府高官としてお富の前に登場した事が考えられる。「それらは皆お富には、当然すぎる程当然だつた。」という、「それらは皆」には、二十三年前の二つの行為の意味の他に新政府高官になった新公に再会した出来事が含まれるはずだ。「当然すぎる程当然だつた。」には、上野戦争当時の若いお富が既に、乞食の新公が新政府高官の地位にある今日を予感していた事を意味する。「何か心の伸びるやうな気がした。」という一文は、過去の自分の行為の是認、さらには漠然と予感していた相手の男の運命の行方を現実自分で実感した事の快感であろう。

「新公の馬車の通り過ぎた時、夫は人ごみの間から、又お富を振り返つた。彼女はやはりその顔を見ると、何事もないうちに微笑んで見せた。生き活きと、嬉しさに。……」

二十三年前、上野戦争前夜の雨の日の記憶とその結果としての運命の再開、それらを全て過去の記憶の世界に閉じ込める一連の動作として、彼女は夫に対して微笑んで見せる。そしてその記憶は、現在の彼女の人生を一層華やかなものにするものであった。「何事もないうちに微笑んで見せた。生き活きと、嬉しさに。……」という一文は、現在のお富の過去の行為に対する密かな勝利感を、一人の女としての自分の過去と現在に対する満足感を示している。

「お富の貞操」前編を精読し、最初に「一匹の猫を救ふ為に、新公に体を任さうとした。その動

機」について考える。その理由について「彼女はそれを知らなかつた。」しかしお富にとっては、すべては「当然すぎる程当然だつた。」のである。問題の箇所を引用すると。

『「その代りお前さんの体を借りるぜ。」(中略)彼女の顔にはもう何時の間にか、さつきと少しも変らない、生き活きた色が返つてゐた。しかし新公は狼狽したやうに、妙な瞬きを一つしながら、いきなり又猫へ短銃を向けた。』

本文を精読する限り、お富が「新公に体を任さうとした。」のは、彼女の積極的な意思のように見受けられる。そして「新公に体を任さうとした。」、決心し、行動に出ようとしたお富を見て新公は狼狽したのである。彼は女の一途な積極的な意思表示を示されて、照れ隠しに最初の無意味な行動に戻り「いきなり又猫へ短銃を向けた。」のである。この男の遊び心の戯れの行為が、お富に最終的な決定的な決意を促す。『「いけ好かない!」』というお富の捨て台詞は、表面的には拒否の様相を示しながら新公を受け入れる決心をした彼女の受諾の意思表示である。

「彼の顔には形容の出来ない、妙な表情が漲つてゐた。それは嫌悪のやうにも見えれば、恥ぢたやうにも見える色だつた。(中略)『冗談だ。お富さん。冗談だよ。もうこつちへ出て来ておくんない。……』」

新公に身を任せる決心をしたお富の非常な決心は、結果的に新公に拒否され空振りになってしまう。若いお富はその貞操を守る代わりに、女としての一途な思いを弄ばれ精神的には傷つく事になる。何故こうした結果になったのか。お富の方に身を任せる意思があつたのに新公の側にはその意思がなかつたからである。あるいは、一途な女の行為の前に男の戯れ心が萎えたのである。官軍の密偵としての乞食生活に別れを告げ、一人の武士として明日戦場に立つ身を省みて、若い女の尋常でない決心が彼の心を打つたのである。

『「おれも明日は死ぬかも知れない。よし又死なずにすんだ所が、この先二度とお前と一しよに掃溜めあさはしないつもりだ。(中略)』

「お富の貞操」後半で新公は明治新政府の高官として再登場するわけだが、上野戦争前日夕刻のこの時の彼は、決戦を明日に控えた一人の武士と

して非常な決心の場に居た。戦闘行為を控えた武士としての彼の心に、お富の女としての捨て身の行為が共鳴した結果である。直木三十五「南国太平記」「益満休之助」に描かれた実在の益満休之助のように上野戦争の硝煙の中に消えて行く可能性があったわけである。

『村上新一郎源の繁光、今日だけは一本やられたな。』彼はさう呟きざま、うまさうに黄昏の水を飲んだ。……………」

お富は、貞操を投げ捨てる積極的な行為において戦場に臨む武士の捨て身の行動に匹敵し、武士として明日決戦に臨む新公の精神を凌駕したのである。お富の無償の必死の行為が、新公を圧倒した。土壇場での男の側の退避の意味は、女には理解できなかったが、最終的には納得した。

「彼女が投げ出した体には、指さへ触れる事を肯じなかつた。その動機は何だつたか、—それも彼女は知らなかつた。」

相手の男、新公の行動の意味をお富は理解できなかったが、しかしそれを納得するためには、女の方に男に対する認識がなければならぬ。その認識についてお富は、本能的な勘で全てを察知していたということである。「新公は唯の乞食ではない。—そんな事はなぜかわかつてゐた。」とある通りである。そして問題は、「新公に体を任さうとした。」お富の動機の解明ということになる。お富の行動の謎に迫る前に、若い女であるその実像を把握しておきたい。

「それは素裸足の黒傘を下げた、まだ年の若い女だつた。(中略)それから流しへ泥足を伸ばすと、ざあざあ水をかけ始めた。(中略)彼女は色の浅黒い、鼻のあたりに雀斑のある、田舎者らし小女だつた。なりも召使ひに相応な手織木綿の一重物に、小倉の帯しかしてゐなかつた。が、活き活きた眼鼻立ちや、堅肥りの体つきには、何処か新しい桃や梨を聯想させる美しさがあつた。」

日常生活において積極的な若い女が、剃刀を隠し持って主人の置き忘れた猫を探しに無人となった上野界隈の一商家に立ち戻るところから物語が始まるのである。無人となった商家の一室で貞操の危機に直面した若い一人の野性的、魅力的な女の立ち振る舞いが作品の主題でもある。再び、新公とお富の密室での緊迫した場面に戻ると。問題

は、若いお富の精神的変貌、肉体を伴う彼女の豹変である。一匹の猫の救出のために乞食の新公に身を任せようとした自らの行為の意味を彼女自身知らないのである。自らも理解できない、無意識の突発的行動について考察すれば。

「新公は其処に佇んだ儘、かすかに汗ばんでゐるらしい、お富の襟もとへ目を落した。するとそれを感じたのか、お富は体を捻るやうに、後にゐる新公の顔を見上げた。彼女の顔にはもう何時の間にか、さつきと少しも変らない、活き活きた色が返つてゐた。(中略)『いけ好かない!』お富は忌忌しさうに呟いた。が、突然立ち上ると、ふて腐れた女のするやうに、さつきと茶の間へはひつて行つた。」

新公は、明日の上野戦争に参加する一人の武士である。彼にとっては、お富の貞操は行き掛かり上の戯れに過ぎない。彼女の肉体が切実な要求でないことは、彼がお富の横たわる茶の間から立ち去ったことから分かる。問題は、新公との私闘の途中での彼女の肉体的な明らかな豹変である。「彼女の顔にはもう何時の間にか、さつきと少しも変らない、活き活きた色が返つてゐた。」のである。この時にお富は、乞食の新公に身を任せる決意を固めたていた、その動機について彼女も又分からないと言っている。「お富の貞操」の主題でもある彼女の一瞬の変貌について把握するためには、芥川龍之介の女性観を理解する事が必要である。

3

「奉教人の死」(「三田文学」大正七年九月)は、一瞬の充実の生の瞬間を生きる者への賛美である。三島由紀夫「十日の菊」(「文学界」昭和三十六年十二月)にも通じる日常生活の繰り返しに対する蔑視、一瞬の決断と行動への賛美は、芥川文学の一つの主題でもある。「袈裟と盛遠」(「中央公論」大正七年四月)では「源平盛衰記」以来の袈裟御前のイメージを破壊して二人の心の絆の乖離を主題にしている。貞女袈裟は夫源渡、愛人遠藤盛遠の二人の間を揺れ動く近代的な女になっている。(北村透谷「心機妙変を論ず」では、事件後の遠藤盛遠の精神の覚醒を扱っている。)

「お富の貞操」の新公とお富は、「袈裟と盛遠」

の登場人物の心理の乖離の人物造形を幾分か残しているかもしれない。お富が乞食の新公に身を投げ出した意味も、新公がお富の肉体を見捨てて立ち去った意味も、お富の理解を超えた出来事であった。上野戦争の前夜、互いに気持ちの齟齬のままに別れた二人は、二十三年後に無言で再会する。少なくともこのときお富の側からは、新公に身を投げ出した行為の意味を何かしら納得したはずである。

上野戦争前夜お富は乞食の新公が、自分を未知なる別の世界に導いてくれる何者かであった。彼女の本能は、不可解な人生の未知数を一人の男の運命に託そうとした無目的な行為であった。一か八かの彼女の不確定な決断は、二十三年後に彼女の一瞬の決断が正しかった事の証明として馬車に乗って彼女の前に現れる。「彼女は馬車とすれ違ひながら、何か心の伸びるやうな気がした。」というのは、上野戦争前夜の無鉄砲な自分の行動への彼女自身の自己満足ではないか。

「茶の間のまん中にはお富が一人、袖に顔を蔽つた儘、ちつと仰向けに横たはつてゐた。(四十一字欠)」「改造」初出)とあるが、第一回の「芥川龍之介全集」(「岩波書店」昭和二年—四年)から(四十一字欠)という意味ありげな箇所は、削除されているという。作者である芥川龍之介の遊び心を消去したことについて、小島政二郎、堀辰雄共に編集作業に携わったはずの葛巻義敏は批判している。「矢張りこの『(四十一字欠)』の数字を小説中に保存する事の方が作者の意に添っているのではなからうか。」「芥川龍之介未定稿集」岩波書店)、編集作業の途中で諸先輩の言動に若輩として従った事の不満があったか。確かに芥川龍之介の創作上の遊び心が、失われたのは惜しい。幻のポルノ小説「赤い帽子の女」が、一時芥川龍之介原作と噂されたのも芥川龍之介のこうした小説中の戯れ心が招いた誤解であるなら、死後の彼はさぞや満面の笑いを浮かべているであろう。

「お富の貞操」のお富は、容貌性格において「藪の中」の真砂に通じるものを持っている。戦争前夜、無人の上野界隈の商家へ剃刀を懐にして素足に大黒傘を持って小雨降の中を単身乗り込んでくる若い女、「お黙りよ！お上さんの讒訴などは聞きたくないよ！」と新公をやり込めて、与え

られた自分の責任をてきぱき片付けていく。「顔は色の浅黒い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜実顔でございます。」(「藪の中)」と描かれた真砂に似通っている。「藪の中」の真砂が半年後に「お富の貞操」のお富に変貌したのかも知れない。年少で従順な幼妻文と結婚した芥川龍之介にとっては、こうした女性がある種の理想であったかも知れない。然るべき典拠なくして創作を成しえなかった芥川龍之介にとって「お富の貞操」の素材は、一体何か。「龍之介が主題としたのは若い女の突発的な、微妙な心理」「手薄な心理解剖も、異常な事件の動きに救はれて」(「芥川龍之介」吉田精一)とあるように「お富の貞操」前編は、若い女の異常な状況での心理変貌を主題にしている。この主題についての典拠は、ストリンドベルク「ユリ工嬢」であるという指摘が森本修「お富の貞操」(「芥川龍之介作品研究」駒尺喜美編)にある。

「何と云へば好いんだらう？唯あの時はああしないと、何だかすまない気がしたのさ。」というお富の心理の激変についての主題、戦場のような特殊な環境で豹変する若い女の微妙な心理についての出典は、日頃彼が愛読した外国文学作品の主題としてあるのに違いない。その主題を生かすために舞台を上野戦争前夜の商家の一室に設定したのであろう。そして後編のもう一つの主題、戦争前夜に密室で異常な時を共有した一組の男女が、戦後運命的再会を成し遂げる。相手の男が、乞食の浮浪者から政府高官となっていて女の傍らを無言で通り過ぎるという通俗的筋書きも別の外国文学の出典があるに違いない。私見によれば「お富の貞操」の典拠には、二つの外国文学作品が予想される。そして「お富の貞操」前後編の主題は、互いに繋がっているのである。

4

二十三年前お富は乞食の新公に身を委ねようとした、若い女の性的本能による衝動的行動である、と森本修は言う。前編の主題については、誤りとは言えないが、それだけでは、後編の作品主題に結びつかない。「それらは皆お富には、当然すぎる程当然だった。」の「それらは皆」には、二つの「その動機」と政府高官になった新公に再会し

た事が含まれるなら、女としての娘時代の衝動的性行動とその結果に対する現在の彼女の満足として読むべきではないか。そして過去の衝動的行動が、現在の彼女の生活に何一つ禍根を残していないことを知るべきである。「何か心の伸びるやうな気がした。(中略) 何事もないうやうに微笑んで見せた。生き活きと、嬉しさうに。……」

二十三年前、小雨降る商家の密室で繰り広げられた彼女の捨て身の行為の意味、その結果の満足が作品の終幕を飾っている。お富は、若い娘の直感と本能とで乞食の新公に身を任せることが、女としての自分の波乱栄達の階段を危険ながら駆け上ることであることを認識していたのである。乞食の新公がお富の貞操を奪い、明治新政府の高官として手を取って政治の世界を駆け抜けていったら、物語は新たな展開を見せるであろう。木戸孝允と幾松、伊藤博文、井上馨等と同じ波乱の人生になったはずである。しかし乞食の新公は、お富を自分の危険な人生に引き込む事を避けた。明日戦死するかも知れない彼の武士としての道徳が、理性によってそれを止めたのである。

「お富は思はず足を緩めた。が、不思議にも驚かなかつた。新公は唯の乞食ではない。—そんな事はなぜかわかつてゐた。」

乞食の新公が、二十三年後に再び乞食となって登場したのでは文学作品にならない。又、政府高官の新公にすれ違ったのが、零落した中年のお富であっても文学作品に成りえない。

森本修「お富の貞操」は、出典としてストリンドベルク「ユリエ嬢」を取り上げている。貴族階層の女（ユリエ嬢）と平民階層の男（ジャン）との男女関係の性的な駆け引き、貴族の娘の気ままな性的欲求により振り回される男、貴族として自負心から自滅する傲慢な女（ユリエ嬢）の筋書きを「お富の貞操」に振り当てて、（お富は）「主人の寵愛する猫の命を救い、自分の行為を正当化することにより、未知の世界を知る機会に利用しようとしたのである。ここに情欲を満たすためには貞操を二義的に考えるとする芥川流の倫理観が明

確に描かれている。」と述べているが、「ユリエ嬢」に引き付け過ぎた曲解である。

「お富の貞操」を虚心に読むと、新公のお富に対する肉体的な要求は終始戯れ心がある。「『いけなけりやあすこへお行きなさいな。』新公は薄笑ひを浮べてゐた。」(中略) が、突然立ち上ると、ふて腐れた女のするやうに、さつさと茶の間へはひつて行つた。」

結局、芥川龍之介が「お富の貞操」で扱いたかつたのは、若い女の状況に由る行動の激変振りである。新公のお富に対する戯れには、彼女の日頃の言動に対する好意が感じられる。又、強要されたとは言いながら彼女が積極的に身を挺するには、お富の方でも新公に対する個人的な好意がなければならぬ。

半年前の「藪の中」（「新潮」大正十一年一月）では、強姦された真砂の心理の突然の変貌、不可解な行動について論述した。人間の心の闇、瞬間的に変位する人間精神に対する興味は、芥川文学の主要なテーマであり「藪の中」の先駆的作品「疑惑」（「中央公論」大正八年七月）にも人間精神の闇が扱われている。漱石「心」の主人公は、信頼していた人間に裏切られ不振の念を吐露したが、芥川が作品世界で扱うのは、時と場合において突然変貌する若い女の精神に対する不信である。芥川龍之介にとって若い女の性に関する突然の変貌は、作品創作上の主要なテーマであり繰り返して扱われている。漱石作品全てに見られる人間不信が、芥川の場合は若い女性の性に限定されるのは、芥川の若さによるかも知れない。「開化の殺人」「お富の貞操」「藪の中」等の芥川作品から影響された松本清張は、「潜在光景」「火の記憶」「天城超え」等で性に纏わる意識下の犯罪を描いた。

若い女の性に関する変位を執拗にテーマに扱うには、生母ふく発狂と狂死からの影響、あるいは初恋の人吉田弥生との別離、さらに芥川夫人文が幼な妻で日常生活で手応えがなかった事などが理由として考えられる。